

羽沢さんちの看板娘～BanG Dream! メンバーで大学ラブコメしてみた～

海琳 薫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生を舞台にした、B a n G D r e a m! の青春コメディ。
両親を亡くした俺は、いどこの家に居候させてもらうべく東京へと向かう。空港へ降り立つと、そこには超絶美少女が待ち構えていた。

??一宮卓馬『いちみやたくま』

黒い髪と長身が似合う、ごく普通の大学生。男女両方に程よく人気がある感じ。恋愛経験はない。

?羽沢つぐみ

清楚を具現化したような茶髪の大学生。羽沢珈琲店の看板娘で、A f t e r g l o w のキーボードを担当している。非常に可愛い。ちよつと天然も混じっている。

2
話

1
話

目

次

6
1

1話

高三の某日。

お父さんしか知らなかつた俺に、家族が増えた。

「卓馬、今日からお前の母さんになる人だ」

その女性は軽く頭を下げる。戸惑いと祝福の気持ちで顔はよく覚えていないが、二人は高校生カップルのように初々しく、幸せそうだった。

「じゃ、しばらく家を空けるからな」

「良い子にして待つてるのよ」

「行つてらっしゃい」

もう俺は高校生だ。新婚旅行で一人になるくらい、別に平氣で——しかし、二人はついに戻つて来なかつた。両親を亡くした俺は独り身となり、いとこの家に預けられることとなつた。

??

「あれから長かつた」

俺は独り言を吐きながら、飛行機から降りた。もうある程度納得出來ていたが、やはり唐突に親を亡くすことは受け入れ難い。

結局、地元の大学受験は諦め、東京へと引っ越すことになつた。学費は奨学金で賄い、いとこの家に居候させてもらえることになつた。そのいとこには会つたことがない。何にせよ俺の実母は一歳の時に亡くなつてゐるのだ。第二の母も数日で……この話はやめよう。大きなスーツケースを受け取ると、俺は空港の出口に向かつた。ええと、たしか叔父さんが迎えに来てくれるんだつたつけ——

「ここにちは!」

俺は後ろに倒れ込むと、そのまま地面に思い切り頭をぶつけた。

「痛てえ……」

「だ、大丈夫ですか?」

差し出された小さな手が視界の中に飛び込んで、俺は顔を上げた。目の前に現れたのは茶髪の美少女だつた。なんだか恥ずかしくて、

俺は自力で立ち上がる。

「大丈夫。だけど……君は？」

「あ、お父さんから聞いてなかつたんですね」

女の子は右腕を横に出すと、小さく自分の手を握りしめた。

「私、羽沢つぐみ。空港から家まで案内しようと思つて。卓馬くん……だよね？」

「!?」

こ、こんな美少女が——俺の名前を。

つぶらな瞳と短めの茶髪は凜々しくて。白いブラウスと青いロングスカートが、彼女を清楚色に染め上げていて。

「そ、そうです。俺は一宮卓馬。よろしく」

こんな美少女と同居生活か——不幸中の幸いとは、まさにこの事だな。

その後、俺とつぐみさんは家に向かうべく電車に乗つた。窓から差し込む夕陽が眩しい。

「あの……」

「どうかしましたか?」

移動する間の話しかや、この見た目から俺には気になることがあった。

「もしかしてバンドやつてたりします?」

「!」

つぐみさんの顔がパーンと明るくなつた。

「はい、Afterglowのキーボード担当です！」

そう言つてはにかんだ。可愛い。

「でも……北海道に住んでるんでしたよね。どうして知つてるんですか?」

「友達にガールズバンド好きがいまして。中でもAfterglowは大ファンで、よくライブに行つてたんだとか。もちろん、俺も好きですよ」

「え、そうなんですか!? 嬉しいです」

好きな曲をあげれば枚挙に暇がないが、今はやめておこう。出会い

頭にオタ話をするのは少々気味が悪い。

「ちなみに、その友達の特に好きなメンバーは——」「ぐぐり。つぐみさんの唾を飲む音が聞こえるようだつた。

「蘭ちやんだそうです」

「やつぱり!!」

つぐみさんはテーブルに顔を打ち付けた。

「私、個性が薄くて……蘭ちやんはクールだし、モ力ちゃんはフワフワしてるし、ひまりちやんは元氣で可愛いし、巴ちゃんはとってもカッコいい!でも、私だけ……公式に『大いなる普通』って言われるくらいしか……」

よく分からぬが、自分の個性の薄さに対してコンプレックスを抱いているようだつた。

「いや、気にすることないと思いますよ」

なぜだか俺は即座にフォローした。

「そうですか……?」

「はい。俺、まだ羽沢さんのこと全然わかつてないけど。全力で頑張るところとか、カーテン閉めたり気遣いができるところとか、明るくてよく笑ってくれるところとか……良いと思う。あと、なんと言つても可愛い」

「!」

俺がそう言うと、彼女は顔を手で隠してから、

「……な、ナンパですか?」

「違えよ!!」

指の隙間から目を覗かせた。わかりやすく赤面している。

可愛い、か。うつかり心の声が漏れた。これだと彼女の言うとおり口説いているみたいじゃないか。

「た、卓馬くんは春から大学生でしたよね?」

彼女はわかりやすく話題を変えてきた。

「はい。帝都大学の法学部に……」

「あつ、私も帝大に行くことになりました! 教育学部だけど」

彼女はそう言つて頬をツンツンしていた。

「つぐみさん。俺たち同じ年なんだし、敬語はやめにしないか?」

俺がそう言うと、つぐみさんは目をパチリと動かして、

「わかりました！」

「それ、わかつてないような……」

同じ家に住むつてだけで緊張で死にそうなのだが、大学まで一緒だ
よ。絶対二月一二に死つてやる。

「じゃあ私のことは、つぐつて呼んでくれると嬉しいな」

……『つぐ』だと？

「樂」

言文子

古事記傳説の研究

「わかつたよ。た、た……卓馬くん！」

くん付けで限界らしかった
どうやら女子校に通っていたらしく

「もう、ええ、つぎつぎ俺のきかこ空港まで来てくってありがとう」

「いえいえ」

「本当に良かっただの？」
「これから居候させてもらひ、詫たにと」

彼女はそう言つて笑つた。俺は首を横に振ると

彼女はそう言って笑った
俺は首を横に振ると
背もたれに寄りか

おどてこく申し譯ないんがわ 明日から眠眠不足

「わかつた。着いたら起こすねー

ありがとう、と言つてから俺は

「アーティストのアート」はアーティスト

そんなことを呟いて、俺は眠りに包まれた。

いたがどうがはわからな

……死んだ俺の両親は、天使を置いていってくれた。目の前で彼女が笑顔を振りまいている。それだけで、心の痛みが引いていくよう

だつた。

2話

「むにやむにや……」

「卓馬くん。もうすぐ着くよ」

なにやら話しかけられたような気がして、俺は薄く目を開ける。

「——!」

気づけば隣につぐみがいた。表情までは見えなかつたが、彼女は小さく息を吸つて、

「早く起きないと……イタズラしちやうよ!」

「おはようござります!!」

いい目覚めだ。完全起床か失神かの一択だつたが、前者で助かつた。

電車から降りると、俺はつぐみの隣を歩いた。スーツケースの音がやや耳障りで、会話の邪魔をする。さつきのイタズラとはなんだつたのか——そんなことばかり気になつてしまつて。

「あ、あれは冗談だからね!? どうしても起きないから、つい……」「ああ——」

彼女はあたふたしながら弁明していた。Afterglowのメンバーともこんなノリでやつているのだろうか。ライブでは縁の下の力持的な役割を担つてているつぐみだが、結成のきっかけを作つたともあつて行動力が尋常じやない。

従兄妹『いとこ』にそんな感情は抱かない。そう決めていたはずなのに。会つて数時間で、心は既に揺さぶられっぱなしだ。

「……ダメだな」

俺みたいな明らかに不釣り合いな男と何かあつたりしたら、Afterglowメンバーや激烈なファンに殺戮されてしまう。

あくまで彼女は家族。妹に近しい存在で、この感情は一時の迷いに過ぎない。

「あつ、一番星」

駅を出たところで、つぐみは空を指さした。

「どこ?」

「見てみて。真上にあるよ」

つぐみの視線の先を追うと、薄い雲に挟まれて輝いている星を見つけた。

「お。一番星見つけるの、得意なんだつけ」

「そうだよ。さては卓馬くん、Y o u T u b e のライブ見てたね？」

「バレたか……」

「えへへ、嬉しいよ」

腰に手を当てて勝ち誇るつぐみも、また可愛い。

??

「羽沢龍次郎だ」

「恵子よ」

「一宮卓馬です……」

俺は閉店後の羽沢珈琲店のテーブルに座り、つぐみの両親と挨拶を交わしていた。

「娘に迎えに行かせてすまんな」

「俺は大丈夫ですけど……彼女は忙しいのでは?」

勉強、店の手伝い、町内会の青年部長にバンド活動——一日に50時間ぐらいないと全てはこなせなさそうだが。

「それについては問題ないわ。高校と違つて、大学はたくさん自分の時間があるからね」

「それなら良いんですけど……あと、女子大に進学してなかつたことに驚きました」

「羽丘女子学園は高校までの系列だからな。それに、そろそろ男と関わつておかないと社会に出た時に困る」

厳格な父だつた。強面で、娘とは似ても似つかない。つぐみはお母さん似のようだ。

「別に焦る必要は無いわよ。家にいいオトコも来たしね」

お母さんは満面の笑みで俺の顔を指さした。

「は？　俺？」

「む。そちら辺にいる得体の知れない男などに、ウチのつぐ……みはやらんぞ」

俺は思わず苦笑いをして、

「自分には釣り合わないですよ」

「そうかなー? お母さんは結構卓馬くんのこと気に入つたけどー

♪

「まだ挨拶だけだろう、母さん。決めるにはまだ早い」

「フフ、どうかしらね♪」

つぐみのお母さんは、やはりよく笑う。対照的にお父さんは強ばつた面持ちを崩さない。

「改めて。不躾な自分ですが、よろしくお願ひします」

俺は精一杯頭を下げた。アマチュアにもかかわらず超人気のバンド、Afterglowのメンバーと同じ屋根の下で暮らすことになるとは……

我ながら、胃がキリキリと痛む。見た目も性格も完璧な女に俺が何か出来るとは到底思えないが、せめて彼女の邪魔はしないようにしよう。そう思った。

??

「卓馬くん、13番のテーブルにお願い」

「了解です」

ここに住み始めてから、三日が経つた。俺は実家と繋がつてている羽沢珈琲店の手伝い（バイト）をしている。

居候させてもらっているのだから、当然給料は出ない。それに、この手伝いは俺が志願してやつていることだ。

あと、少しつぐみに樂をさせてやりたかった。高校時代のスケジュールを見せてもらつたが、社畜顔負けの鬼日程だつたからな。……彼女の穴埋めをする形で、俺は開店から閉店まで永遠と働いていふるという訳だ。

「ご注文は?」

「サンドウィッチ、パン抜きで」

「それならサラダなどもございますよ」

元々、俺は人当たりのいいほうだと思う。つぐみのように良い笑顔を周りに振りまくことは難しいが、人間と関わることはそこまで苦

じゃない。

まあそんなことはどうでもいい。それよりも自分の仕事だ。

「フレッシュサラダ入りました！」

こうして何日か働いて感じたことだが、おかしな客が明らかに少ない。地域柄がいいのか、親切な人が多かつた。

「おう」

叔父さんもとい、つぐみのお父さんは厨房に立つて黙々と料理をしている。スイーツから本格飯までお手のもの。そりやあ、人気店になるわけだ。

「はい、こちらがブレンドコーヒーになります♪」

おまけにお母さんは愛想がいい。あの看板娘もいるのだから、羽沢珈琲店は将来安泰だ。

「あ、お客様待ってる
「俺行ってきます！」

昼の時間帯は特に忙しい。俺たち三人は、何時間立ちっぱなしのやら。

さて……接客時は笑顔、と。
「コホン。いらっしゃいま——

ん？

「あれえ、今日はつぐいないんだ？」

「……一名です」

とつても見覚えのある二人組が、目の前に現れた。

「もしかしてえー、バイトの方ですかー？」

「モカ、そうやつてすぐ店員さんに絡まないで」

赤メッシュにパンク風の服装をした美女と、薄い緑のパーカーを羽織った、銀髪の美女。

なんてことない俺の顔を不思議な目で眺めていたのは、言わずもがな、美竹蘭と青葉モカだ。